
4444

川犬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4444

【Nコード】

N4269G

【作者名】

川犬

【あらすじ】

突然行方不明となった狩野勝を助けるために美佐たちはある情報をもとに不気味な塔にたどりついた。しかしそれは地獄の始まりだった。完結しました！感想ください。

プロローグ

プロローグ

近藤美佐は床に座り込んだ。あたりはもう血の海だった。もう立てない。

美佐にはそんな余力がまっただくなかった。

「どうしてこんなことに・・・」

気がついたら一人だった。

いや、一人になっていた。もう皆死んでしまったのだ。

目の前に二つの死体が転がっていた。

それは、目玉が飛び出ていて、内臓もぐちゃぐちゃになっておりもうグロテスクという言葉を超えていた。

少なくとも99%の確率でだ。

もうびくりとも動かない死体。

これは仲間のものだった。

どうして仲間たちがこうなったのか？

すべてはあの時始まったのだ。

あの遠くて近い過去のときに

1、美佐はケータイのメール着信音に気づき重いまぶたを開けた。そしてケータイを手探りで探し出し開いた。目にはメールの内容が映る。そこにはこう書かれていた。

おきてる？実は明日俺たちでパーティをするんだ
美佐も来ないか？メンバーはいつもの7人だ。
そんではしょはトントンド。わかった？？

美佐は飛び起きた。

「勝からだ・・・」

美佐はこう返した。

いいよ^^

で時間は？

するとすぐに返ってきた。

わりいわりい

おしえるのわすれてた

朝の9時集合だよ

美佐はわかったと返信をして明日の準備に取り掛かった。

美佐は勝のことが好きだった。

だからいつもは面倒くさがって行かないというのが明日は特別だ。
「もっていくものはこんなもんな。」

ケータイを充電し、バッグの中には財布と薬それと少量のお菓子を

入れた。

「よし準備OK！今日はもうねようっと」

時間は10時半だ。

美佐は時たま寝坊をすることがあるので今日はもう寝なければならぬ。

少し早すぎるかもしれないが明日のためだった。

美佐は布団に包まり明日のことを考えていた。

勝達と楽しく遊んでいる自分が脳裏に映った。

そしていつの間にかすやすやと眠っていた。

翌朝、美佐は予想以上に早く起きていた。

時間は5時だ。

「少し早すぎたかな。」

この生まれてから21年間の中で5、6番目ぐらいに早く起きたのではないか。

もう少し寝ようと考えたが経験上二度寝すると寝過ごしてしまう可能性があるのでパジャマから着替えちゃんと顔を洗い、朝食を食べた。

朝食は昨日セブンイレブンで買っておいたハムサンドだ。

それを口にはおぼりながらメールをうって送信した。

おきた？

うちはもうおきたよ^^

そううつっていた。

まもなく勝からメールが届いてきた。

おきてるよ

今飯食ってる

うちも！

一緒だね^^

そうだね

そういういつものメールのやり取りをしていた。

美佐はハムサンドを食べ終えて、早速トントンへ行くことにした。トントンはその名のとおり豚をメインに料理を作る和風レストランである。

家からまずバスに乗り、少し歩けばすぐそこにある。

約25分といったところだろうか。

近いと言った方がいいのか遠いといった方がいいのかよくわからない場所にあった。

美佐はバス停にいた。

するとバスはすぐに来た。乗るとほんのりといやなにおいがする。無理もない。このバスは10年近く走り続けているのだ。

それぐらい古ければこのぐらい臭くなることは明らかだった。

とりあえず美佐は座るところがなかったのだ。たっていた。

1つのバス停をこえまた超えると目的のバス停までたどり着いた。

そこで運賃の150円を払い、降りた。

美佐はわくわくしていた。

この後の惨劇を知らずに。

バスから降りた美佐は待ち合わせ場所のトントンまで歩いて行った。
そしてついた。

「よお、はいいな」

そういったのは工藤昌介。

「私が寝坊するとでも？」

そう言い返すと昌介は少し戸惑った表情でいた。

「ま、まさかあ」

そう言っているが美佐は嘘を見抜いていた。

ばればれた。昌介は昔から嘘をよくつくのに下手なのだ。
しかしそこで言い返すと少し面倒なので話題を変えた。

「そつえばみんなは？」

「まだだよ」

今度は嘘ではない。

昌介の嘘を見抜くコツがある。

簡単なことだ。

昌介は嘘をつくとき少し戸惑った表情を見せたりする。

それで簡単に見抜けるのだ。

美佐は時計を見る。

8時40分。

20分前だった。

少し早すぎたのかな・・・

そう思った直後、2人が来た。

「よう！」

一人は男。

彼の名前は木村卓也という。

メンバーの中では一番力持ちだ。

「こんにちは」

そしてもう一人は女。

つい最近卓也と付き合いはじめた相川沙織だ。

彼女はおっとりした性格でメンバーの中でも人気者だ。ま、私ほどじゃないけれど。

美佐は沙織に少しのライバル心を抱いていた。ほんの少しだけ。

もちろん友達としてでも見ている。

そっちはかなり。

「1年ぶりだね」

沙織は笑みをこぼしながらそう言った。

「だよ。気がついたら1年たってたんだもん。」
笑いが飛び交う。

1年、それはあっという間だった。

「そういえばさっき勝からメール来たよ」

卓也はそう言い私たちにケータイを見せた。

ごめん

おくれる。みんなにいつといて

「えー主催者がおくれるなんてー」

昌介は苦笑した。

すると勝を除いた残りの3人が来た。

「ハローー!!」

彼は黒井豊。

ナルシストだ。

自分のことをかっこいいと思っている。

いつも鏡を持参していた。

そして暇さえあれば鏡を見ていた。

「よう！おまえら」

彼は小柳裕也。

ぽっちゃり系だ。

裕也は自分をニートと言っていた。
その記憶だけが鮮明にある。

「こ、こんにちは・・・」

最後の一人、彼女は上田麻衣。
少し控え目な性格だ。

だがこのメンバーの中では誰よりもやさしい。
悔しいが勝よりもだ。

「よし！あとひとりだ。」

そう卓也がいうと、裕也がこう言った。

「あれまさか勝がきてない？」

卓也はうなずきまだ知らない3人にあのメールを見せた。
ここまではいつも通りだった。

あれから30分がすぎた。

「それにしても遅いな」

豊はまちくたびたようにそういった。

確かに遅い。それでもって連絡も来ない。

美砂も少し待つのに疲れてきた。

そこへ晶介は我慢出来ずこういった。

「ねえ先にトントンいこうか」

みんなはしばらく考えた。

そして最終的にはしかたがなく先にトントンに行くことにした。
トントンまでの道のりを歩いている。

「勝めーきたらぶったおしてやる!!」

祐也は機嫌が悪そうだ。

「まあまあおちついて」

祐也の機嫌をなおそうと豊はがんばっていた。

「できるかー!」

祐也は続けた。

「だいたいおまえだっていつも鏡持って自分の顔見てうつとりしてるし」

「うつ・・・」

豊は黙り込んでしまった。

その様子を見て沙織が笑っている。ついでに卓也もだ。

豊は顔を赤くした。

そうこうしているとトントンに着いた。

「着いたね」

麻衣は控えめにそう言った。

卓也はケータイを取り出した。

「どうする? 勝から連絡一つも入ってこないけど」

美砂は時計をしてみる。

今は十時ジャストだ。

中に入ってもおなかを空かしていないのであまり食べられないだろう。

やはりここは勝を待とうとみんなに言うべきか。

美佐は少し迷っていた。

すると沙織がこう言った。

「みんな！勝を待とうよ！ね？卓也もそくだよね？？」

「おう！その通りだ！みんなは？」

皆も同じらしく沙織の意見に賛成した。

もちろん美佐もだ。

卓也は勝にメールを打っていた。

どうした？ はやくこい！

みんな待つてゐるぞ！

そして送信した。

10分後、勝から返信はまだ来ていない。

20分後、まだ来ていない。

30分後、まだ来ない・・・

ついに裕也の勝に対する怒りは爆発した。

[illegible]

!

思いつきり叫んでいた。

美佐はすぐ隣にいたので思わず耳をふさいだ。

「うっせえよ」

昌介は裕也を注意した。

「だっておっせえじゃねえか勝」

「だから卓也がメール送ったんだろうがぁ？待つことができないのか!!」

「もうできねえーよ……俺帰る……」

「勝手にかえってる!!!!!!」

「ああわかったよ帰るよほらじゃあな!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そういつて裕也は帰ってしまった。

「つたくなんだし」

裕也は本当は帰るつもりはこれっぽちもなかったが頭に来て歸つた。とその時道の向こうに誰かがいるのに気がついた。

裕也は目を凝らす。

「おまえは！！」

そういった時には裕也は首に矢を放たれていた。

それはみごとに命中。裕也は口から勢いよく赤い液体を吐き出した。即死だった。

矢を放ったある人物はもうそこにはいなかった。

4 (前書き)

そろそろすごいことになっていきますんで

「それにしても裕也を追い返したおれが言うのもなんだけど勝のやつおせなー」

そう昌介が言うのと沙織がこう言った。

「もう一度メール送ってみれば？」

昌介はうなずく。

「わかった。そうだ、みんなも勝にメールおくらうぜ」

「でもそうしたら勝が困っちゃうんじゃないの？」

卓也がそういうと昌介は首を振った。

「いやいいんだ。きつとおれの送ったメールに勝は気づいてないんだ。だからみんなで順番にメール送ればきつと気づくさ」

その提案に皆うなずいた。

まず昌介から送ることにした。

はよこい！

それはとても短い文だった。

次に沙織。

みんな待ってるよ？

早く来て

次に豊。

遅いぞ！！

次に麻衣。

みんな待っていますので早く来てください。

その文は実に丁寧に書かれていた。
次に卓也。

いそげー！　！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！

そして最後に美佐。

遅いよどうしたの？

みんな待つてるから早く来てください^^

これで全員のメールが勝に送信された。

しばらくするとメールの着信音が聞こえた。

1分単位でみんなに届いてきた。

そしてみんなのメールの内容がまったく一緒だった。

それはこんな内容だった。

勝は私がある場所で縄で縛りつけてある。心配しなくていい。

まだ死んではない。

しかし、これから書いてあることに逆らったりしたら・・・
 どうなるか分かっているな

これからお前たちに行ってほしいところがある。

それは君たちが中学生時代のときの秘密基地があったところだ。期限は5日間。もし来なかったら小柳と同じことになるだろう。

-
-
-
- ?

美佐たちの中で沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは卓也だった。

「なに？・・・これ」

・・・。

また沈黙が続く。

昌介が冷静にこう言った。

「つまり勝がだれかにさらわれたんだ。・・・たぶん」

「え・・・」

美佐は思わず同様した。

昌介が美佐の反応に気がついた。

「大丈夫だ。きっと脅しだろう。」

卓也は一つ気になっていたことを話し始めた。

「お、おい裕也と同じことになるってどういうことだ。」

美佐はいやな予感がして裕也に電話をした。

プルルルル プルルルル

ツーツーツー

何度電話をしてもつながらない。

10回目。

ツーツーツー

15回目。

ツーツーツー

16回目。

プルルルル プルルルル

もしもし？

「つながった。」

みんなの視線が美佐に向く。

「ま……」

「静かに」

何かを言いたそうに卓也はしていたが沙織に静かにといわれ口を閉じた。

「もしもし？ 裕也？ え？ …… はい。 そうなんですか。 え？ ……

私は近藤美佐です。 はい…… さようなら」

そして美佐はみんなに今のことを言った。

正直ショックだった。

「裕也が誰かに殺された……」

「……」

皆何も言えない。

美佐はつづけた。

「犯人は遠くから矢を放ったんだって。 それでねその矢に手紙が巻きつけられていたんだって。 その手紙は私たち宛てだって。 だから今すぐ取りにきてだって。」

「そ、それ本当なのか？」

昌介にそう言われ美佐はこくりとうなずいた。

「うそでしょ・・・」

沙織も相当ショックを受けているようだ。

その中で一人卓也がこう言った。

「と、とりあえずその手紙とやらを取りに行こう！何か手掛かりが書いてあるかもしれねえ」

そして珍しく麻衣も皆を励ました。

「そうだよ。みんな行こう？」

普段あまり話さない麻衣がいきなり励ましてきたので妙に違和感を感じたが、少し安心した。

「よいいこう！」

そういつて、昌介が歩きだした。

皆もそれにつれて歩き出した。

警察署に向かつて。

麻衣は何か身の危険を感じていた。

なんだろう・・・この感じ・・・

なにか恐ろしいことが起ころうとしている・・・

そう麻衣は感じていた。

しかしあえてみんなに言わなかった。

あまりみんなにそういうともしそうでなかった時に恥ずかしい思いをするからだ。

昌介はいまだに裕也がしんだことが信じられなかった。

俺は夢でも見ているのか・・・

どうなってるんだよ・・・

それと裕也を殺した犯人はだれなんだ？

昌介は混乱していた。

豊はついさっきの裕也との言い合いを思い返していた。

あれが最後の光景になっちゃうなんて・・・

豊はこうなってしまったことをとても悲しんでいた。

しかしここで泣いたらみんなに泣いているところを見られてしまう。
ぐつと泣くのをこらえた。

沙織はこう考えていた。

きつと卓也は自分に責任を感じている

きつと自分が追いついたりさえしなかったら今頃トントンの中で昼飯を食べていたと思っっているんだろうな・・・

卓也は沙織の考えとは逆の考え方をしていた。

俺は悪くない・・・絶対に！

第一向こうからきれてきたんじゃないか！それをおれは止めただけだ。そしたらあいつ勝手に帰ったんだ。おれは正しいことをしたんだ！

美佐は裕也のことなんか頭になかった。

勝、大丈夫かな？

それしか彼女の頭の中には残っていなかった。

そしてかれらは警察署についた。

警察署につくと早速警官が来た。

「君達かい？裕也の友達は？」

その問に昌介が答えた。

「はい。手紙を見せてください」

「わかった。こっちにこい」

「はい。」

即答で昌介はうなずき中に入って行った。

皆も昌介のあとについて行った。

向こうにつく間に警官は話しかけてきた。

「いやあ、ちよつと読ましていただいたんだけどもちよつとおかしなことがかかれていますんだよ」

「おかしいこと？それはなんですか？」

そう言われ警官は何かを考えていたがそれを止めた。

「すまない。忘れてしまった。向こうについてから手紙を見よう。」

それに昌介は少しあきれた顔をしたが、それに警官は気づかなかった。

後ろにみんながついてきているか昌介は確認した。

ついてきていることを確認すると昌介は再び前をむいて歩いた。

ずんずん進んでいく警官はとても勇気のありそうな人だった。

年齢は30代前半だろうか。

そんな気がした。

しばらくして個室につき、警官は近くのいすに座った。

テーブルにはくしゃくしゃになっていく紙が置いてあった。

周りにはほかに何も無い、実にシンプルな部屋だった。

みんなが入りドアが閉まった。

皆が入ると警官はくしゃくしゃになっている紙を指さした。

「それだよ。みてごらん。なにかわかったらいつてくれ。」

「わかりました。」

さつきから緊張しているのだろうか、昌介以外誰もしゃべらない。それも仕方がなかった。

ついさつきまで一緒にいた友人がいまはもうこの世にはいないのだ。しゃべらないのは当然だ。

そして昌介はその紙に視線を落とした。皆もその紙を見る。

そこにはこう書かれていた。

——メンバー残り6人——

「なんだこれ……」

一番はじめに豊がつぶやいた。

その声に警官が気がついた。

「どうだ？なんのことかわかったか？」

……

誰も答えない。

なぜならみんなもうわかつているからだ。

しかしあえて言わなかった。

メンバー残り6人。その文字が示しているのはまぎれもなく昌介、卓也、豊、美佐、沙織、麻衣の6人のことだ。警官はそれに気づいていないようだ。

皆反応すら示さないの、警官は少し首をかしげた。

そしてもう1度、こう言った。

「なにかわかったのか？」

「……はい」

そういったのは卓也だった。

まずい。俺たちが誰かに狙われている。

そついう確信をもった卓也は震えあがりながら今まであったことを

すべて警官に話した。

すべてを知った警官はこう言った。

「なるほど。そういうことがあったのか。それは大変だな。よし今すぐ部下に勝の搜索を命令する。それと秘密基地ってどこなんだ？」

「それが・・・」

美佐は続けていった。

「それが私たちもまったく心当たりがないんです。」

その言葉に警官は質問をした。

「どういうことだ？」

その質問に美佐は答えた。

「私たちが中学生の時には秘密基地なんて作ったことがないからです。」

その美佐の答えに警官は少し困った表情を見せた。

「うーむ・・・わかった。あとは警察に任せて君たちはもう帰りなさい。」

「はい」

昌介はそう言い警官から背を向けた。

皆も背を向ける。

「あ、そうだ」

警官は止めた。

昌介は再びふりかえる。

「なんですか？」

その反応に警官は少し微笑んだ。

「自己紹介まだだったな。私は菊池太郎だ。」

「・・・はい」

昌介たちはそんなことで呼び止めたのかとあきれてしまった。

警官はまた微笑んだ。

「ほらもつと元気出せ！よしじゃあな！」

元気出せるかよ、こんな時に。

美佐たちはとりあえず今日はもう家に帰ることにした。

途中でみんなにわかれ、あのおんぼろバスに乗り家に帰った。なんだかものすごく時間が長く感じられた。

少し疲れているのだろうか。

家に着くなり美佐はそのままベッドに倒れこみ寝てしまった。

夢の中で美佐は道を歩いていた。

周りには何もないただの道だ。

前に誰かがいる。

離れすぎているせいでよく見えない。

美佐は少しずつその人に近づいた。

相手が見えたたん美佐はぎよつとなつて逃げた。

相手が弓矢をこつちに構えていたからだ。

男の人が女の人かもまだ分らない。

美佐は全力で走ったが矢が勢いよく飛んできて、背中にブスリと刺さった。

バタリ

美佐は倒れこんだ。

「わぁ！！」

美佐は眼を覚まし、飛び起きた。

そして自分の家だと確認すると安堵の息を漏らした。

麻衣は夜道を犬と散歩していた。

まだ裕也が死んだことが信じられなく眠れなかったからだ。

なので、気分転換に外で犬と散歩していたのだ。

犬はチワワのメスで名前はチャッピーだ。

「キャンキャン！！」

突然チャッピーが吠えだした。

チャッピーはめつたに大きな声で吠えることがあまりないのにやけにうるさい。

まるでこの先に行くなどとも言っているようだ。

「どうしたのチャッピー？」

「キャンキャン！！キャンキャン！！」

麻衣は目の前を見てみた。

誰かがこつちに向かってくる。

よく見えない。

「だれ？」

「ふふふ・・・」

不気味だ。

麻衣はいつも持参しているライトを取り出し相手に光をあてた。
その途端、麻衣は震えあがった。

「あ、あなたは！」

そう言った時にはもう遅かった。

矢が脳天に突き刺さり麻衣は倒れた。
血があたりいっぱいに降り注いだ。

次の朝。

美佐はケータイのメールの着信音で目が覚めた。

「こんな朝早くに・・・」

そう愚痴を吐きながら美佐はケータイの画面を見た。
それは昌介からだった。

麻衣が死んだ！

はやく警察署にこい！！

美佐は一瞬にして目が覚めてしまった。

それと同時に恐怖が体中を駆け巡る。

思わずケータイを落としてしまった。

「そ、そんな・・・なんで？うそでしょ・・・」

その手には汗が染み出て来る。

とにかく美佐は、朝食も食べずに警察署へ急いだ。

「美佐が来た！」

沙織が叫ぶと、皆こつちを見てきた。

沙織は頬を少し赤らめながら美佐を呼んだ。

「こつちだよ！！」

その声に美佐は反応したらしく、こつちに走ってきた。

「はあはあ・・・」

ずっと走りっぱなしだったのだろう、汗まみれになっていた。

昌介はみんなが来たのを確認した。

「よしみんなきたな・・・なかにはいるう・・・」

みんな元気がない。

まあ私もそうなんだけど・・・。

沙織はこのままいくといやなことが起こる気がしてならなかった。

昌介が中に入っていくと沙織たちもそれにつれて中に入って行った。

「みんなきたな？」

中に入るや否や警官、菊池がそう聞いてきた。

昌介は再び確認した。

「・・・はい。」

「よしじゃあこっちへこい」

そう言つて菊池はこの前のあのシンプルな部屋に案内してきた。

菊池は部屋に着くと沙織たちを中にいれ、ドアを閉めた。

ガタンッ！

静かな部屋にドアのしまる音が響き渡った。

その音を全く気にせずに、菊池は1枚のくしゃくしゃになった紙を

昌介に見せた。

「それなんだが・・・麻衣に刺さった矢に縛り付けてあった。」

昌介はそれを聞くと同時にくしゃくしゃになった紙のしわを伸ばした。

そこにはこう書かれていた。

メンバー残り5人

「い、いやああああ!!」

叫んだほつを皆見る。

沙織は大声でふるえながら叫んでいた。

「沙織・・・」

卓也は震えている沙織をそつと抱き締めた。

その光景を皆、何も言わずにただ見ている。

沙織は少しは安心したのか震えが少し治まった。

警察なんて信用できない・・・

卓也はそう思った。

皆もおそらく、いや絶対にそう思っているだろう。

菊池ももう終わりだ。

麻衣が、菊池が安心しなさいといったその夜に誰かに殺されたのだ。さつきから菊池が何かを言っているが卓也の耳にはさっぱり入ってこなかった。

その帰り昌介はある提案をうちあげた。

「なあおまえら、おれたちで犯人が誰か突き止めて勝を助け出さないか？」

「ああ。いいぜ」

その提案に卓也は賛成した。

「わたしも・・・いいよ」

つづいて美佐も賛成した。

「あたしも・・・」

沙織も賛成した。

「俺は・・・いやだ!」

しかし、豊が反対した。

「どうしてだよ」

昌介がきくと豊は答えた。

「だって俺達、命ねらわれてんだぜ？そんなにうるちよろ動き回ってたら、確実に殺される！！」

豊は必死だった。

その時、豊のケータイが鳴り出した。

ピロピロピロピロ・・・

豊はケータイを取り出し、開いた。

それを見た瞬間豊は震えだした。

「う、うそだろ・・・」

卓也や昌介ものぞきこむ。

勝からのメールだった。

君たちがこの私を探そうとしないから殺しちゃうんだ。だからこの私を探してヨ

じゃないと・・・みんな死ぬよ？

昌介は息をのんだ。

「どつかでおれたちを見ている・・・」

「そんな・・・」

豊は座り込んでしまった。

ケータイを見たまま固まってしまっている。

「豊・・・犯人を探そう！」

「・・・」

豊は何も言わない。

しばらく、時間が経った。

そして、豊がやっこの思いで口を開いた。

「賛成」

「へ？」

卓也が少し安心した表情で聞いた。

「俺・・・探すよ・・・犯人」

「よしこれできまりだな。」
そして始まった。
いや始まってしまったのだ。

地獄の始まりが。

美佐たちはあのメールを見返していた。

「ねえ、中学校に行ってみようよ」

美佐がそう言うのと皆顔を持ち上げ、こつちを見てきた。

「そうだな。」

昌介は美佐が言ったことに賛成し、立ち上がった。

皆も立ち上がる。

「よいいくか！」

「え？いまから？」

豊が戸惑った表情を見せると、昌介は少し顔をしかめて見せた。

「当たり前だろ？今はまだ10時だし、それとあのメールお前にもきただろ？そこに期限は5日間って書いてあったじゃないか。もうあと今日も入れて4日しかないんだぜ？」

「うう・・・」

豊はしぶしぶうなずいた。

「じゃあいくか」

中学校はここから近い。

あるいて、せいぜい7、8分だ。

かくかくふるえている豊を見ながら、美佐は少し笑いかけていた。こんな豊が怖がりだとは思ってもみなかったのだ。

豊の自己紹介を訂正しよう。

彼は黒井豊。

ナルシストだ。

自分のことをかっこいいと思っている。

いつも鏡を持参していた。

そして暇さえあれば鏡を見ていた。

+ 怖がりである。

これでよしと。

中学校についた。

この中学校の名前はW中学校である。

「ついな。」

卓也がそうつぶやくと、沙織が身震いした。

「きゃーこわいよー」

わざとらしく沙織は卓也に抱きつく。

「だいじょうぶだ！おれがついている！」

「きゃーかっこいいー！！」

・・・

美佐はついさっきまであんなに怖がっていた沙織が一変したのには驚いた。

まさかここまで仲がいいとは・・・

それはさておき、中学校の周りを美佐は見渡した。

ここはもう2年前から廃校になっている。

その廃校になった中学校に美佐は一步足を踏み入れた。

「なにも怪しそうなところなかったね・・・」

豊は中学校探索の後の帰り道だった。

あのあと結局何も見つからなかった。

やはり無意味あそこを探すのはだったのだ。

しかし、探さないと死ぬ。

タイムリミットは今日を入れないと残り3日だ。

隣にいた昌介が答えた。

「でも怪しいとするとあそこしかないんだよねあゝ」

「はあ・・・」

豊はため息をついた。

それに気がついたのか、昌介はこっちを向いた。

「大丈夫だって！きつと見つかるさ！警察がいなくても。」

「……だよな。あ、もうすぐそこだからじゃあな」

「おう！」

豊は昌介から別れると一人で赤に染まっている夕焼けを見つめながら、とぼとぼと歩いていった。

とその時、遠くから誰かがこっちに歩み寄ってきた。

豊も無意識的に歩み寄る。

間が10メートルぐらいになったとき相手の顔がわかった。

その途端、豊は驚いた。

「そ、そんな!!」

その男は弓矢を持っていた。

それを豊に向ける。

「や、やめろよ。どうしてだよ!! なんでおまえが!!」

その男は不気味に笑う。

バ
シ
ユ
ツ

その男の手から矢が放たれた。

それは一直線に豊に向かう。

豊は眼を閉じた。

[illegible]

! ! ! ! ! !

誰かはわからないが横から押してきた。

豊は宙に舞い、倒れこんだ。

その時に頭を打った。

•
•
•
○

豊は氣を失ってしまった。

「なにも怪しそうなところなかったね・・・」

隣にいる豊が独り言のように話し出した。

「でも怪しいとするとあそこしかないんだよね」

「はぁ・・・」

豊がため息をつく。

どうやら今日、なにも見つからなかったのが相当ショックらしい。

昌介は豊のほうを向く。

昌介は励ます。

「大丈夫だって！きっと見つかるさ！警察がいなくても」

そう、警察なんかを頼ってはならない。

絶対にだ。

あくまで形だけ頼っているのである。

麻衣が殺されたのだ。もう警察になんか頼れるはずがない。

「・・・だよな。あ、もうすぐそこだからじゃあな」

「おう！」

豊がこちらに背を向けて自分とは違う方向に進んでいった。

豊と別れてから1分たったところだ。

ケータイの着信音が鳴りだした。

びるるる　びるるる・・・

昌介はポケットからケータイを取り出し、開いた。

メールが一通来ている。

それは何と勝からだった。

しかし、おそらく勝ではないだろう。

これは犯人のもののはずだ。

メールをチェックした。

そこには、こう書かれていた。

豊を助けなくていいのかい？

そのメールを読んだ瞬間、昌介は考えるよりも前に行動していた。それは豊が向かった方向へ走っていた。

いそげいそげいそげいそげいそげいそげいそげ．．．．．

走っている豊の姿が見えた。

誰かに近づいて行っている。

だれだ？

ぼんやりとしか見ることができない。

しかしこれだけはわかった。

何かを構えている。

さらに近づいたところでそれがわかった。

それは．．．．．弓矢だ！！！！！！

「そ、そんな！！」

不意に豊の声が聞こえた。

「や、やめるよ。どうしてだよ！！なんでおまえが！！」

昌介は全力で走った。

まにあええええええええええ！！！！！！！！！！！！

豊の肩に触れた。

とたんに豊は吹っ飛んだ。どうやらかなり強くおしたようだ。

「はあはあ．．．」

弓矢を持っていた犯人の姿を探す。

もう周りには誰もいなかった。

「くそ！どこだああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

飛んできた矢を見る。そこには紙が巻きつけてあった。

その紙を開いてみる。

昌介、危なかったな

ヒントをやるう。

時間は明日の深夜0時に中学校にこい。

あのメンバーでだ。

まってるよ。

来なかったら、もう皆死ぬだろう。

それはもうはじめからわかっていたかのように書かれていた。

昌介はしばらくそこに突っ立っていた。

夕焼けが不気味なほどに赤く見えた。

「う、うーん・・・」

豊は眼を覚ました。

そして目をあける。

「こ、ここは・・・？」

すると卓也が走ってきた。

あとから昌介と美佐と沙織も来る。

「大丈夫か？」

「ここは・・・どこ？」

周りを見渡す。しかしここがどこだか分らなかった。

「ここはW中学校だよ。」

昌介が豊を立ち上がらせた。

確かにここはW中学校のようだ。

「そろそろだな・・・」

突然、卓也に行こうといわれた。

「なにが？」

「あ、そっか。お前にはまだ何も言ってなかったな。」

卓也は少し間を開けて言った。

「犯人にここへ今日の深夜0時に来いと言われたんだ。」

豊の表情が一変する。

「や、やばいよ！だめだ！だって犯人は・・・」

「犯人は？」

美佐が聞く。

「・・・あれ？思い出せない・・・」

豊はそう言いながらもあの時の光景を思い浮かべていた。

・・・。

だめだ。どうしても思い出せない。

そこへ昌介がこう言った。

「思い出せないのも無理はない。あの時お前、頭思いっきり打ったんだよ。……俺が押したせいで。ごめんな強く押しちゃって」

豊がそこへこう言った。

「いや、押してくれなかったら俺死んでたから。」

沙織が来た。

「あと10分だよ。」

その声に皆反応して沙織を見た。

沙織は少し戸惑う。

美佐はみんなが話をしているときに外を見ていた。

ずっと誰も使っていないせいか、埃がたまっている。

外を見ていると校庭になぜかぼつんと建物が建ってた。

とても小さい建物だ。

それがさっきから少しずつ大きくなっている。

まるで風船が膨らむようだ。

いやそれとは少し違う。

「なにあれ……」

美佐がそう言っても誰も気づいていないのか話を続けている。

「あと10分だよ。」

沙織がそう言った。

そう言った途端、卓也が窓から外を見た。

「お、おい！なんだあれ！！」

その声に気が付き、集まった。

「ほんとだ。最初来たときはあんな建物なかったよね。あ、大きくなった。」

沙織が興奮気味に話している。

「ほんとだ。あれ、まるで塔じゃん。」

確かに豊の言うとおりである。

あれは、塔だ。しかし、不気味なオーラが漂っている。

「ねえ。あと何分？」

「7分。」

美佐がみんなに聞くと、卓也が即答で答えた。

「いってみよう」

昌介がそう言って勝手に教室から出て行った。

「お、おい！」

卓也が止めようとしたが間に合わなかった。

しばらくして、昌介が校庭に出てきた。

謎の塔を眺めた後、こつちを見上げてきた。

そして、手でこつちへ来いとやっている。

「どうする行く？」

美佐はみんなに聞いた。

「いくしかないだろ」

卓也はそう言って、教室からでていった。

「うちらもいこう」

沙織と豊と美佐も教室から出て行った。

美佐たちは校庭についた。

昌介が待っていた。

「ここなんじゃないか？」

「え？」

突然、昌介にそう言われ少し戸惑ったがすぐ意味がわかり、返した。

「たぶん・・・」

自信なさげに言った。

「ここに・・・勝がいるのか・・・？」

卓也がそう言った直後、皆のケータイの着信音が鳴り響いた。

びろろろろ・・・

ちやららつちやらら・・・

いろいろなケータイの着信音が聞こえる。

それが周りに響いてなんだか不気味だ。

「メールだ。・・・あ！勝からだ！」

沙織がそう言って見せてくる。

「あ、おれのもだ」

「ぼくのも・・・」

昌介も豊もだ。

そして美佐は、自分のも見してみる。

「勝・・・」

件名には勝と書いてあった。

急いで中身を見る。

その塔に入りたまえ。

その中に狩野はいる。

・・・。

どうやら勝からではなく、犯人からだ。

勝のケータイを使っているらしい。

「・・・どうする？入る？」

「やめといたほうがいいよ！罠かもしれないし・・・」

沙織の提案をあつさりと豊は拒否した。

それに、卓也が反応した。

「馬鹿かおまえは。もう俺らには時間があまりないんだよ！それにこれがもし最初で最後の勝を助けるチャンスだったらどうする？」

「そ、それは・・・」

豊は黙り込む。

「はいるぞ。」

「・・・わかったよ。」

豊はしぶしぶ了承した。

「入ろう。」

昌介がそう言うのと美佐たちは中へはいって行った。

先頭は昌介だ。

昌介はこういうときはかなり頼りになる。

前までは勝がリーダーだったが、勝がいなくなっただけで昌介がリーダーの代わりをしている。

ただの嘘つきかと思っていたが、美佐は少し見直した。

昌介は先頭に立った。

そして、錆だらけの扉を開く。

ギギギ・・・

「さむ！」

卓也が叫んだ。

確かに外と比べてひんやりとしている。

目の前には階段が3段なっただけでその先に扉が一つあった。

「この扉の先かな・・・」

豊がぼつりとつぶやくと昌介がこう言った。

「いや、きつと違う。だってこの塔はもつと高いだろ？きつとまだまださ。」

「うわぁ・・・まだまだか・・・。」

早くも豊は疲れたような眼をしている。

そうまだまだ始まったばかりなのだ。

マダマダハジマッタ

バカリナノダ。 4

13（後書き）

最後の4の意味はそのうちわかります。

「行くぞ？」

昌介が皆に聞く。

皆うなずいた。

それを確認すると、昌介は扉を押した。

少しずつ開いていく。

「部屋・・・？」

豊がぼそつと呟く。

この部屋は真ん中にテーブルが置いてあるだけのシンプルな部屋だ。ちよつと、警察署のあの部屋とほぼ同じだ。

真ん中のテーブルに何か置いてある。

それは1つのドアノブだった。

そしてそのすぐ横に紙きれと接着剤が置いてある。

その先に扉がある。

「なんだこれ。」

卓也がドアノブをとったその時、突然扉が閉まった。

ガタンツ

「きゃっ！」

沙織が驚いて飛びのけた。

「大丈夫か？」

昌介が心配する。

「う、うん・・・。」

「その紙きれに何を書いてあるか読むぞ？」

「いいぜ」

卓也がそういった。

そして昌介はその紙きれを手に取り、読んだ。

この部屋から脱出しろ。

「なんだこれ。簡単じゃん」

昌介は読み終わるとそうつぶやいた。

そつ、ただこの部屋から出ればいいのだ。
扉を開けて終わりだ。

昌介はテーブルに紙きれを置いた。

卓也は昌介が読んだ紙切れを手にとった。
それを読んだ。

「・・・どこが簡単なんだよ・・・。」

「ん？」

昌介はその声に反応する。

「いやだって、普通に扉を開ければ終わりだろ？」

「ばかか。お前は。」

「何か間違っているか？」

「・・・だって俺らが入ってきた扉は、外からしか開けられないんだよ。」

「えっ？」

「しかも、そっちにあるもう一つのもここからじゃ開けられないんだ。さつき試した。」

・・・。

「このドアノブをくつつければいいんじゃない？」

美佐がいうと卓也は表情を曇らせた。

「1つしかない・・・。」

昌介がまとめた。

「つまりだ。このドアノブを使って戻るか、勝を助けるかどうかしかないんだな。」

美佐にとっては究極の選択だった。

ここから戻れば助かるのだが、勝が助からない。

逆に進めば勝を助けられるかもしれないのだが、私たちが助かるかどうかかわからない。

どっちを選ぶにしてもダメな予感がした。

やはりここに来てはいけなかったのではないか。

しかし来なければ勝の命が・・・。

美佐は迷っていた。

「すすむぞ。」

迷っているうちに、昌介は勝手にドアノブを手にとった。

「いいよな。みんな。」

最初に卓也がうなずいた。

次に豊と沙織。

みんなうなずいたので、美佐もうなずいてしまった。

何か嫌な予感がする。

本当にこれでよかったんだろうか。

昌介はドアノブを接着剤で扉にくっつけた。

しばらくして固まらせた後、昌介はそつと扉を引いた。

「開いた！」

その時みんなのケータイの着信音が鳴り響いた。

美佐はケータイを見る。

4 クリア

4 ?

おそらくさっきのが階段の4段目に当たる所にあるからだろう。

そのあとにクリアと書かれているのはあの部屋から抜け出せたから。

「いそごうぜ。」

昌介はみんなより早く読み終え、歩き出した。

美佐たちはあわててついて行った。

何段なるのだろうか。

1分くらい上り続けた。

その間、皆無言だ。

緊張しているのだろう。自分もだが。

昌介がずっと先にいる。

かなり急いでいるようだ。

美佐が歩くスピードを上げるとあっという間についた。

立ち止まってたからだ。

昌介の前には扉がある。

その扉に(44)と刻まれていた。

「44段目・・・。」

沙織と卓也と豊も追い付く。

「なにこれ。44?」

卓也がそう言った。

昌介が答えた。

「きつと階段の44段目に当たるところだから44つてきざまれているんだ。」

「なるほど・・・。」

沙織がそうつぶやいた。

「・・・入るの？」

豊が恐る恐る昌介に聞いた。

「ああ。」

「・・・。」

豊の表情は沈んだが昌介はあまり気にしていないようだ。
まあ美佐自身もあまり気にしていないのだが。

「あけるぞ？」

昌介はドアノブに手をあてた。

「やめようよ・・・もう・・・。」

豊が昌介のことを止めようと昌介の手を引っ張った。

「豊・・・わりい、勝を助けるためだ。」

そう言つて無理やり豊の手をほどき、勢いよく開けた。

「・・・わかったよ。」

豊は開けられたせいか、諦めた。

しかし表情がさらに曇る。

中に入るとそこは前の部屋とほぼ同じだった。

ただテーブルに置かれているものが違った。

そこにはドアノブではなく、カプセル型の薬物らしきものがうつ置かれていた。

おそらくこの薬を飲めということだろう。

その時またケータイの着信音が鳴った。

豊はケータイを見る。

薬を一人一つずつ飲め。

予想通りだった。

おそらくこの中のどれかに毒かなんかが入っているのだろう。

そう思えば思うほど飲む気になんてなれなかった。

「飲むぞ？」

昌介が薬の一つに手を取った。

「え、飲むの？ 飲んじゃいけないよ。毒薬が混ざっているかもしれないし。」

豊がそう言うのと昌介の手が止まった。

「飲まなきゃ、先に進めないだろ。」

・・・どうかしている。

勝を助けるためだけに、こんな危険まで冒さなければいけないのか。本当に飲まなければいけないのか。

飲みたくない。

飲みたくない！

ノミタクナアアアアアアイ！！！！！！！！

しかし皆なんのためらいもなく飲んだ。

ここで飲まなければ自分のせいで先に進めなくなり勝を助けられない。

豊は恐る恐る危険物を手に取り、それを目をつぶった状態で勢いよく飲み込んだ。

ゴクリ。

目を開けた。

何にもなっていない。

「なにもなかったね。」

沙織がそうつぶやいた。

「どういっつもりなんだ？ 犯人は。」

卓也がそう言うのと昌介は首をかしげた。

「さあ？」

「いったい何のつもりで。でもきつと何かあると思うんだけど・・・」

その時、扉のあく音が聞こえた。

「よし先行くぞ。」

昌介はそう言つて先に言つた。

沙織もあとに続く。

後ろから美佐と卓也と豊も続く。

次は何段目になるのだろうか。

沙織は大体予測できた。

次は444段目・・・。

おそらく、いや絶対そうだろう。

今までも4段目、44段目と続いていたのだ。

この調子だと次は444段目だ。

不吉だ。4（死）が並んでいる。

何か危ない。

何段ぐらい上つたのだろうか。

卓也もそうだが皆も息を荒らしている。

ただ黙々と上る。

誰一人しゃべらない。

ただ、息を荒げている音だけが聞こえてる。

はあはあ・・・。

「まだか・・・。」

だれひとりしゃべらないので、呟いてみた。

しかし、皆気が付いていないらしく誰一人反応すら示してくれなかった。

15分ぐらい上り続けただろうか、ようやく扉が見えた。

そこに何とか追いた。

その扉にもまた数字が刻まれていた。

444、と。

昌介は扉にたどりついた。
ようやく。

ついに。

もう息を荒げていた。

「はあはあ・・・入るぞ。」

もう周りの意見はどうでもいい。

ただ早く勝を助けたかった。

疲れ果てていてそれで精一杯だ。

足がずきずきする。

そしてパンパンに膨れ上がっていた。

まだ何とか歩けるがなるべく歩きたくなかった。

ギギギ・・・

扉の開く音が聞こえてくる。

中に入る。

また同じような部屋だ。

ただ今度はテーブルの上には何もなかった。

「こんどは・・・はあはあ・・・なんだってんだよ・・・。」

またケータイの着信音が鳴りだすのか。

みんな中に入り、最後の豊が扉を閉めた。

ガチャリッ

鍵のかかる音が聞こえてきた。

「な・・・！」

急いで扉を引つ張る。

しかしびくともしない。

「くそ・・・。今度はなんだよ・・・。」

その時、やはりケータイの着信音が鳴った。

昌介は、ケータイを開く。

30分たてば扉が開く。

それを読みケータイを閉じた。

「なんなんだ……。」

昌介は座り込んだ。

こんな意味もないようなことをしても犯人に何のメリットはない。

それなのにこんな意味のないようなことをしているということはいったいどういうことなのか。

何か利益になることもあるのか。

もしかしたら、犯人は自首するつもりなのか。

それが一番いいがそういうわけでもなさそうだ。

またメールが来た。

今度はどうやら、美佐と豊には来ていないようだ。

そのメールを確認する。

さっき飲んだ薬は毒薬だ。

「そ、そんな……。」

それを読んだ途端に昌介は恐怖のあまり震えで、ケータイを落としてしまった。

「い、いやだ・・・いやだああああ!!」

卓也は叫んだ。

さつき飲んだのが毒薬？

信じたくない・・・!!!

「おれ・・・死んじまうのかよ・・・。」

昌介のふるえている声が聞こえてくる。

卓也は扉をたたいた。

「あけてくれ!!頼む!頼むよ!!」

しかし扉はびくともしない。

「なぜなんだ?おれたち殺して何がおもしろいんだ!？」

沙織が倒れた。

それに気が付き、卓也が駆けつけた。

「沙織!!」

沙織は動かない。

唯一呼吸はしていた。

卓也は思いつきり沙織を揺さぶった。

「お願いだ!死ぬな!!」

それを言ったのと同じだった。

沙織は突然目を大きくあけ、ビクンと動いた。

口から赤い液体が噴き出す。

「さおりいーーーーー!!!!!!」

赤い液体は卓也の肩に降りかかる。

沙織は今度は完全に動かなくなった。

「・・・さお・・・り・・・。」

一滴のしずくが卓也の目から落ちた。

「い、いや・・・。」

美佐も口を押さえて涙を流す。

昌介はこらえている。

しかしやはり震えている。

「なにが目的なんだあ！ああ？いつてみるよお！！！！！！！！！！」

卓也は上を向き大声で叫んだ。

それはもうほぼ、悲鳴に近い声だった。

卓也のこんな声を聞いたのは初めてだ。

少なくとも美佐は聞いたことがない。

よほど沙織が死んだことがショックなのだろう。

「うわああああ！！！！！！」

卓也は上を向いて叫んでいる。

昌介を見るとうつろな目で卓也を見つめていた。

「あああああああつごほつごほ！！！！」

突然卓也が口を押さえた。

「だ、大丈夫？」

近寄った美佐は思わずきゃつ、と叫んで後ろへ下がってしまった。

卓也の手には真っ赤な血が付いていたのである。

彼の歯にも付いている。

「た、卓也！！」

豊も駆け寄る。

卓也はそのまま倒れこんだ。

「おい！おい！おおおおおおおい！！！！！！！！」

豊は思いつき卓也を揺さぶる。

卓也は反応しない。

もう卓也までもが倒れてしまった。

これでこの不気味な塔に入って2人も死んだ。

さつき、豊が言ったとおり戻ったほうがよかったというのか。

「さよならだ。」

不意に昌介の声が聞こえてきた。

美佐は勢いよく振り返る。

昌介は笑っていた。

「だめええええええええええ！！！」

しかしそう言った途端に昌介から笑みが消えた。

•
•
•
•
•
•
○

もう美佐は涙が止まらなかった。

そしてひざまずいた。

「もうやめて……。」

豊は震えてまっすぐ前を向いている。

豊が向いている方向にはさつきなかつたはずの扉があつた。赤い扉だつた。

豊はその赤い扉に向かって歩き出した。

「ゆたかあああああ！だめ！いつちゃだめ！！」
しかしそれに振り向かず歩いていく。

「ゆたかあああああ！！！！！！！」

「俺たちにはもうこれしかない。いくぞ。」
・・・

豊の様子がおかしい。

「ゆたか？」

「はやくいくぞ！」

さつきよりも口調が強くなった。

どうしちゃったの？まるで別人みたい・・・

美佐は震えながらもついていく。

赤い扉を豊があけるとまた階段が続いていた。

「また・・・。」

「いくぞ。」

本当に豊はどうしたのだろうか。

「まって。」

その声にも反応せずに黙々と豊は歩いていく。

美佐もこれ以上言っても無駄だと思い、豊とはなさないことにした。
階段に足を乗せる。

そして次の階段にも足を乗せる。

豊の方を見える。

豊はさつきと同じ様子だ。

きつと3人も死んでしまつてかなりショックを受けているのだろう。

それで別人みたいに性格が変わってしまったのだ。

美佐はきつとそうだと自分に言い聞かせた。

そしてまた階段に足を乗せた。

「はあはあ・・・。」

さつきから20分ぐらいたっている。

しかし、扉は見えてこない。

足が痛い。感覚がなくなってきた。

「ゆたか・・・。はあはあ。まって。休憩しよ。はあはあ・・・。」

しかし豊は振り返らない。

反応すら示してくれない。

「ゆたか！」

思いつきり叫んでみた。

「うつせえんだよ！！！！てめえはだまってついてきりゃいいんだよ！！！」

「え・・・。」

豊は完全におかしくなっている。

「ねえ。どうしたの・・・。はあはあ・・・。ゆたか？」

「どうもしてねえつつてんだろ！ああ？聞こえねえーのか！！！！このくそ！！！！」

・・・。

今の言葉に美佐はカチンときた。

「くそはあんたのほうよ。」

「んだとお？」

豊はいきなり立ち止まった。

「てめえだろ！！！！くそ。」

「あんたは豊じゃない！豊はそんなやつじゃない！！！」

「おれあ、豊だっていつてんだろおがぁ！！！」

完全に狂っている。

いままでこんなやつといたなんて信じられない。

「ころすぞおお！！！！！」

そう言つて不意に豊は突然振り返り、こぶしを美佐めがけて飛ばしてきた。

あれからまた、30分たった。

もう何段上ったのだろうか。

おそらく4000段ぐらい上っただろう。

美佐の予想ならもうすぐ4444段目になり部屋があるはずだ。

そこで豊を殺す。ころす。KOROSU。コロス!!!!!!!!!!

もう豊なんて死ねばいいと思う。

もうすぐ……。もうすぐ……。

目の前に突然、扉があらわれた。

赤い扉。まだ真新しく、4444と刻まれている。

予想した通りだ。

「はあはあ……。」

もう美佐の足の筋肉が悲鳴を上げている。筋肉の鳴き声が聞こえそうなくらいにだ。

ここで豊を殺せるんだあ……。ふふふ……。

豊は先頭にたつて扉を開けた。

美佐は眼を開けて笑うのを必死にこらえる。

もう笑いたいよ。はやくして……。

扉の向こうへ豊と美佐は足を踏み入れる。

「やつときたか。」

扉の向こうの部屋に入ると1人の仮面をかぶった、人間がいた。

その隣に、これまた仮面をかぶった人がいる。

しかし、そっちは縄で縛られている。

美佐は直感的に縄で縛られているほうの人は勝だと思った。

ここで豊を殺し、勝を助ける。

一石二鳥!!!!!!!!!!

そう心の中で美佐は思った。

「いっちゃんいい。」

豊はその人に向かって歩みだす。

しかし美佐は動かなかった。

「貴様もこい。」

美佐はゆつくりとその人のことをにらみながら歩みだした。

その人の前のテーブルには金づちと大型の包丁が2つずつ、置いてある。

豊はテーブルの前でとまる。美佐もそこで止まった。

「それを使ってお前ら二人で殺しあえ。」

きた！！！！

このときを待っていたのだ。

美佐は本当に笑いそうになった。

だがこらえる。

もうすぐ豊が死ぬんだ！！！！

うれしい……。早く殺りたい。あああははははははははは

つははは・
・
・
・
・
・
・
・

美佐の目つきが変わった。

そして、美佐は大型の包丁と金づちを手にとった。
豊も手に取る。

「はじめろ。」

美佐はそういった瞬間に包丁で豊の腹を切りつけた。

「グ……は……み、美佐……貴さま……。」

豊の腹から血が噴き出る。止まらない。

ああ……、タノシイ!!!!

豊は座り込んだ。口からも血が出る。

「はあはあ……、なにを……かんが……え……て……い
る……んだ。」

「あんたをころすこと。」

美佐は即答で答えた。

「お、お……まえ、ま……。」

もう豊の言葉も聞こえない。

今度は美佐は金づちで豊の頭を思いっきり叩きつける。

「……。」

豊は死んだ。しかし、何かが物足りない。

もっと……もっと……もっととおおおお!!!!!!

美佐の金づちで豊を殴る動作は止まらなかった。

そして、包丁で刺しまくる。

血がついても全く気にしない。

「よくやった。」

不意に男の人の声が聞こえてきた。

さっきの仮面をかぶった人だ。

「おまえは豊をよく裏切った。次だ。こいつを殺せ。」

美佐はゆっくりと振り返る。そして仮面をかぶった人の指をさして
いる方向へ目を向ける。

そこには縄で縛られている人がいた。

美佐が勝だと思っている人だ。

「い・ち・よ・。」「

「……ははははは！勝が助からなくなってもいいのか？」

「
アンタヲコロス。
」

「なに!？」

飯面をかぶった人がそういった時にはもう遅かった。

包丁が仮面をかぶった人を貫く。

血が噴き出る。

「よくも……!!!!」

構わずブスリブスリと刺していく。

「ああ！……！！……おまえは……なぜ……さつきの……豊の……俺を……ころそうと……いう提案……に……さんせ……い……せずに……いま……おれを……。ごほ！！ゴホッ！！！！！」

そう言われた時、美佐の手がぴたりと止まった。

「え・・・？」

「だからあ……豊を……どうして……ころしたあ……。仲間を……。」

仮面をかぶった人は続ける。

仮面の下では笑っているのだろうか。

「ふふ……おまえは……ウラギリモノだ……。」

「うっさあああああああああああああああああい！！！」

! ! ! ! ! ! !

「ウラギリモノ。」

「だあああああまああああああえええええ！！！！！」

目を強くとじ、思いつきり金づちと包丁で刺したり殴りまくる。

豊は、まさかあの時このクソ野郎と一緒に殺そうと思っていたのだろっか。

そう思うと後悔と罪悪感が残った。

・
・
・
。

美佐はそつと目を開けた。

美佐は床に座り込んだ。あたりはもう血の海だった。もう立てない。

美佐にはそんな余力がまっただくなかった。

「どうしてこんなことに・・・」

気がついたら一人だった。

いや、一人になっていた。もう皆死んでしまったのだ。

目の前に二つの死体が転がっていた。

それは、目玉が飛び出ていて、内臓もぐちゃぐちゃになっておりもうグロテスクという言葉を超えていた。

少なくとも99%の確率でだ。

もうぴくりとも動かない死体。

私が殺したんだ。殺したんだ。コロシタんだ。

美佐の脳裏を何度もよぎる。

「まさるなの？」

美佐は顔を持ち上げ縄で縛られている仮面をかぶった人に聞く。

「・・・。」

しかし、その人はしゃべらない。

「ねえ。」

「・・・。」

また何もいわない。ただこつちを見ていることは分かった。しかし、仮面の下表情は分からない。

「・・・。」

美佐も何も言わなかった。そして、がんばって立ち上がろうとする？

おかしい。立てない。さっき余力がなかったと言ったがそれはそれぐらいショックを受けたということだ。

立てないということではない。

それなのに立ち上がれない。

いつの間にか息が切れはじめた。

「はぁはぁ・・・。」

どうなっているの？そのまま倒れこむ。痛みは感じない。というよりも感覚がない。

意識が遠のいていく。

あれ・・・？

あれれれ・・・？

私どうしちゃったの？

どうしてうけないの？

美佐は疑問だらけだった。一瞬別の世界が見えたような気がする。

美佐はこの時わかった。もう・・・私・・・死ぬんだ。

「はぁはぁ・・・は・・・ぁ・・・。」

徐々に呼吸がとぎれとぎれになる。

また別世界が見えた。

なぜだろう。しぬというのに怖くない。

笑い声が聞こえているような気がする。何だろうこの声。どこかで

聞いたことがある。

ああ・・・。あの人だ・・・。。

それを最後に美佐の意識はなくなった。

「あははははは！！！！！！！！あははは！！！！毒がやっときいたかあ！！！！あははは！！！！！」

仮面をかぶった人はとにかく狂っているかのように笑っていた。

いつの間にか、縄はほどかれていた。

これは彼が自分でほどこいたものである。

目の前には扉がある。そこにはやはり4444と書かれていた。

21（後書き）

この人、誰だかわかりますか？わかりますよね。
本当ならここでおわつてもいいのですが、誰だかわからない人もいる
と思うので解決編みたいなを書きます。

扉が突然、がたりと開いた。大きな音をたてる。それと同時に笑い声も消える。

「だれだ。」

低い声で仮面をかぶった人は言った。

「おれだよ。」

昌介が階段からのぼってきたようだ。

「な！？おまえ」

「そうさ。俺が死んだとも思ったか。」

「なに！？」

目の前に現れた男。なぜ生きているのか。

「ほらよ。」

そう言つて、小さなカプセルをポケットから取り出し、放り投げた。投げられた小さなカプセルは宙を舞う。

「薬……。飲んでいなかったのか……。」

そう言つと昌介は少し笑った。

「俺が飲むとも思ったか？勝。」

「……。よくわかったな。いつわかった？」

勝といわれたその人は、仮面を外した。

そこから、勝の顔があらわれる。

昌介はそれを確認すると、口を開いた。

「はじめから。」

「もう少し詳しく言え。」

「お前から来たメールでわかったよ。」

勝は少し顔をゆがめた。昌介はつづける。

「最初に来たメール、お前少し遅れると言つてたな。しかし、その時、見つけたんだ。お前が人ごみに紛れこんでこっちを見ているのを。」

「ばれていたのか。」

「ああ。俺は少しおかしいと思った。しばらくすると裕也が帰った。それと同時におまえは裕也のほうに行った。そして、裕也が死んだ。勝、おまえはその時に勝を殺した、だろ？」

「。。。。」

勝は何も言えない。

ただ、下を向いている。

「おまえはもう生きる資格なんてない。」

そう言つて、昌介はどこから持ってきたのか、拳銃を取り出した。弾を補充する。

そして構える。

勝は顔を上げた。そしてそつと微笑んだ。

「俺を殺せ。」

やさしい声だった。

「。。。。わかった。」

銃口を勝の頭に近づける。勝は逃げようとはしない。どうやら、本当に死ぬ覚悟でいるようだ。

バンッ

勝はどさりと倒れた。もう動かない。そして、冷たくなっていく。

「さてと。」

昌介は今度は自分の頭に、銃口を近づけた。

「俺も殺したんだ。その罪滅ぼしをしなきゃな。」

昌介は誰もいない前を見ながら、そう言った。

「。。。。」

一滴の涙がこぼれた。
バンッ

2度目の銃声が鳴り響いた。

22 (後書き)

次がエピソードです。

エピソード

菊池はチャッピーの散歩をしていた。麻衣が死んでしまい、代わりに飼うことになったのだ。

それにしても、あの5人はどこへ行ったのか。昨日から連絡がつかない。

チャッピーが突然走りだした。

「キャンキャンー!!」

「どうしたんだ。」

チワワなのにすごい力だ。大型犬よりも強いのではないか。

チャッピーはぐいぐい、菊池を引っ張り、どんどん進んでいく。

「どうしたんだ。チャッピー。」

しかし、チャッピーは走る。菊池もチャッピーがあまりにも必死だったので、一緒に走ることにした。

突然どうしたんだろうか。

チャッピーが止まった。それと同時に菊池も止まる。

ここは、中学校だ。もう廃校になっている。W中学校というらしい。

「W中学校?」

とりあえず、菊池は中に入ってみることにした。

吸い込まれるように、菊池は中に入った。

校庭に誰がいる。目が悪いせいか、よく見えない。

チャッピーはそれに向かって、走り出した。

菊池もあとを追う。

5mぐらいになると誰だかわかった。

「工藤!」

そう叫ぶと、昌介ははっとなつて、こっちを向いた。泣き崩れていた。それを思いつき手で拭いていた。

「どうしたんだ?みんなは?」

・・・。

それに、昌介は答えない。答えられないようにも見える。

「ボロボロじゃないか。」

「みんな、おれが殺した。」

「え？」

「犯人は俺だ。」

菊池は戸惑ってしまった。

「それは本当なのか？」

昌介は少し戸惑った表情を見せながら、ゆっくりとうなずく。

昌介は嘘をついた。

「みんな、おれが殺した。」

「え？」

「犯人は俺だ。」

「それは本当なのか？」

昌介はゆっくりとうなずいた。

「……。わかった。警察署まで来るんだ。」

「はい。」

菊池はケータイを取り出し、誰かに電話をしていた。

「……はい、もしもし？菊池です。……今犯人を捕まえました。」

「……車を用意してください。……さようなら。」

そして、ケータイを切った。

しばらくするとパトカーが来た。

それに、菊池と昌介は乗り込む。

パトカーに乗り込んだ昌介は、あの時のことを思い返していた。

「さてと。」

昌介は今度は自分の頭に、銃口を近づけた。

「俺も殺したんだ。その罪滅ぼしをしなきゃな。」

昌介は誰もいない前を見ながら、そう言った。

「……。」

一滴の涙がこぼれた。

バンッ

2度目の銃声が鳴り響いた。しかし、弾が貫いたのは、昌介の頭じゃなかった。

4444と刻まれている扉だった。結局死ねなかった。

死ぬ勇気が足りなすぎていた。

塔はいつの間になくなっており、いつの間にか校庭にいた。

自分は助かったのだ。いや、助かってしまったと言ったほうが正解だろう。

自分だけ助かってしまった。

そう思うと、涙が止まらなくなっていた。

昌介は思い返すのをやめて、疲労がたまっていたのかいつの間にか寝てしまっていた。

俺は、おまえたちの分も頑張って生きていくと、誓いながら寝ている時の昌介の顔は少し戸惑った表情のようにも見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4269g/>

4444

2010年10月28日07時41分発行